

Y09b

## アーティストインレジデンス in 国立天文台野辺山

衣笠健三 (国立天文台)、鈴木幸野 (志賀高原ロマン美術館)、大西浩次 (長野高専)、西岡真木子、井出秀美、内藤誠一郎、斎藤正雄、ほか国立天文台野辺山スタッフ (国立天文台)

今年7月～10月に行われている長野県山ノ内町立志賀高原ロマン美術館の企画展「宇宙をみる眼—アートと天文学における「宇宙とはなにか」」のプレイベントとして、国立天文台野辺山宇宙電波観測所 (以下、NRO) のアーティストインレジデンス (以下、AIR) を、5月25-28日に実施した。企画展は地域振興とアートと天文学という領域にまたがる新しい企画としてすすめており、長野県ゆかりの若手アーティストを対象にしたNROでのAIR実施はまさにこの企画のコンセプトを具体化したものであるといえる。また、AIRの実施は国立天文台をはじめとした国内の天文研究機関では初めての試みである。

AIRとは、アーティストが実際に開催地などに数日から数ヶ月間滞在してそこでの体験からインスピレーションを受けた作品を制作するという企画である。アート業界においては頻繁に実施されており、日本では地方公共団体等が企画しているものもある。海外ではいくつかの天文研究機関で実施している例がある。

今回のAIRは志賀高原ロマン美術館主催、NROが協力する体制で実施し、出身や在住を含めた長野県ゆかりのアーティスト5名が参加した。NROでは45m電波望遠鏡の共同利用には影響を与えない範囲で、かつ、天文台として活動している現場を見てもらうことを意識した。また、制作活動に入るアーティストもいることも考慮し、活動場所とともに、自由時間を多く取るようスケジュールを組んだ。初めての試みであったため不安もあったが、参加者の方々から「いい時間で、たくさんのもので得られた」といったコメントが得られた。本講演では、天文台としてこの企画に協力した狙いや経緯の説明とともに、AIRの実際の様子などについて報告を行う。